広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第52号　2003　261－270

『捷解新語』のエ段音表記について

― 原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記を中心として ―

李　東郁

(2003年9月30日)

On the e-column orthography of the "Ch' ŏp hae shin ŏ"
— Focusing on the 「-jɔi」 and 「-jɔ」 orthography in the original version —

Lee Dong-Wook

The interpretation on the Japanese e-column orthography 「-jɔi」 and 「-jɔ」 in the "Ch'ŏp hae shin ŏ" doesn't go beyond a hypothesis and the opinions vary from scholar to scholar. This paper is a proposal to the existing various explanations on the e-column orthography, in which I will try to give proof for the hypothesis that "the orthography of 「-jɔi」 and 「-jɔ」 in the "Ch'ŏp hae shin ŏ" shows that the e-column of the Japanese language of that time existed in two parallel forms [-je] and [-e]". I searched for theoretical evidence for this hypothesis in the manner of orthography in the transcript of "Sa yŏk won", the 「-jɔi」 and 「-jɔ」 orthogaphy for 「ne」 in the "Ch'ŏp hae shin ŏ" (original), the manner of correction for the 「-jɔi」 and 「-jɔ」 orthography in the correction process, the e-column orthography in "Wae ŏ ryu hae" etc.

Key words: "Ch' ŏp hae shin ŏ", "Wae ŏ ryu hae", e-column orthography
キーワード：『捷解新語』，『倭語類解』，エ段音表記

一．はじめに

『捷解新語』のエ段音表記は原刊本(1676)・改修本(1748)では「-jɔi」・「-jɔ」[1]の二様の表記で記されており，重刊本(1781)では例外なく「-jɔi」で統一されているが，『捷解新語』のエ段音表記が当時の日本語のどのような音を表したのかについては定説を見ず，未だ解けない難問の一つとして注目されてきた。それは当時の朝鮮語の母音体系に単母音［-e］と二重母音［-je］とが成立していなかったので，日本語のエ段音を表すために当時の朝鮮語の中で一番相応しかったと思われる三重母音の「-jɔi」と二重母音の「-jɔ」を以って表記した結果，これらが当時日本語のエ段音の母音部が［-e］であったのか，それとも［-je］であったのかを推測しにくくさせているためであるが，問題はそこにとどまらず，口蓋半母音/j/の有無に関するキリシタン資料との表記上の食い違い，「-jɔi」・「-jɔ」表記の混用等の問題まで絡み合っており，エ段音表記に対する説明はさらに複雑になる。本稿はこのようなことに注意しながら，『捷解新語』原刊本のエ段音表記を中心として，「-jɔi」・「-jɔ」表記はどのような日本語のエ段音を表そうとしたのか，どうして日本語のエ段母音部を表すのに「-jɔi」・「-jɔ」の二つのハングル表記が表れるのか，どうして『捷解新語』のハングル表記にはア行のエ以外のエ段音節にも口蓋半母音の/j/が出てくるのかなどの問題について考えてみようとするものである。

二．［-je］・［-e］の並存の可能性

『捷解新語』原刊本(1676)……「-jɔi」・「-jɔ」

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：多和田眞一郎（主任指導教官），沼本克明，町　博光，江端義夫，深見兼孝（国際協力研究科）

『捷解新語』改修本(1748)……「-jɔi」・「-jɔ」
『捷解新語』重刊本(1781)……「-jɔi」

『捷解新語』のエ段音表記は上記のとおりであるが，「-jɔi」・「-jɔ」表記についての従来の説明は原刊本をもとにして大きく次の三つの場合に分けて考えられる。

(A)　ア行のエは［je］，その他のエ段母音部は［-e］[2)]
(B)　ア行のエを含む全てのエ段母音部は［-e］[3)]
(C)　全てのエ段母音部は［-je］[4)]

(A)の立場はキリシタン資料のエ段音表記に即して，原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記は，当時の日本語のエ段音においてア行のエは［je］，その他の音節の母音部は［-e］であったことを表したものであると考える。そして原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記については朝鮮南部方言で「-jɔi」・「-jɔ」は初声「'」に結合する綴字と，それ以外に結合する綴字とでは音価に違いがあり，「kjɔi」「kjɔ」・「tjɔi」「tjɔ」の類は［ke］・［te］などのように発音されることから類推して，ア行のエに対する「-jɔi」・「-jɔ」表記は［je］を，その他のエ段音節の母音部は［e］を表したものであると説明している。

(B)は平安初期までａ・ｉ・ｕ・ｅ・ｏの五つであった単母音が十六世紀末期までａ・ｉ・ｕの三つに縮小され，明治末期までは再びａ・ｉ・ｕ・ｅ・ｏの五つに変化すると言う母音の変化過程，つまりア行のｅ・ｏが約三百年間の間に復活するということについて疑問を抱き，ア行のエに対するキリシタン資料の「ye」表記や，朝鮮資料の「'jɔi」・「'jɔ」表記に於ける口蓋性は積極的に考慮しない。(しかし，キリシタン資料の「ye」表記と朝鮮資料の「'jɔi」・「'jɔ」表記とが［je］を表した可能性についても完全に否定しているのではない。)

(C)の場合，ローランド・ラングはキリシタン資料以前の日本語のエ段音は一時口蓋音であったと推測し，その証拠として /e/＋/u/＞/joo/ のような拗長音の成立過程，『伊路波』や『捷解新語』のような朝鮮資料がエ段音を口蓋音でとらえていること，現在の九州地方に数は多くないが，エ段音をすべて口蓋音として発音する方言が散在していること等をあげている。そして原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記は日本語の[-je]を表したもので，ここの[-je]は九州方言のエ段音と関連すると説明する。つまり原刊本のエ段音表記は九州方言のエ段音を表したもので，九州方言のエ段音はキリシタン資料の前段階のエ段音を反映するという論法であり，このような論法で行けば，当時のエ段音を論じるにおいて，原刊本とキリシタン資料との食い違いの問題は解消されるという解釈である。

しかし，これらの解釈には多少の疑問が残る。まず，「-jɔi」・「-jɔ」の二つの表記が其々エは［je］を，エ以外のエ段音の母音部は［-e］を表したという(A)の対応関係は普通の言語学的知識をもって外国語を転写する立場から考えてみれば，受け入れがたいところである。原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記と朝鮮南部方言の音韻現象との関係付けは(A)の説明には有効であろうが，このような音韻現象が十九世紀後期から起こり始めたこと[5)]，このような音韻現象は朝鮮語における単母音［-e］の存在を前提にしなければならないこと，ハングル制定当時はもちろん現代朝鮮京畿方言にも「-jɔi」と「-jɔ」は音韻論的区別を有すること，初声に「'」を含む「'jɔi」と「'jɔ」の場合は現代朝鮮南部方言でさえ随意的交替が許されず弁別力が保たれていること等を考え合わせれば，説明が難しくなる。

次に(B)と(C)は全てのエ段音に於ける口蓋性を認めるかどうかということで対立しており問題となるが，今までの諸説によれば，それを否定するよりは肯定するほうの傍証が多いようである。『日本語の歴史　4移りゆく古代語』[6)]では，九州の多くの方言でサ行とザ行がシェ・ジェと口蓋化するだけでなく，エ列のすべて，または大部分の子音が口蓋化する傾向があると述べ，室町時代の中央語でも，シェ・ジェであり，イェでもあるから，おそらく，他の行も，今の九州方言のようにミェ・ニェ……のような口蓋化音だったのではないかと推測している。そしてキリシタンの神父たちがこれを書きあらわそうとしなかったことについては，現代九州方言をみてもこの傾向は特別に注意ぶかい音声学者でなければ気づかないようなものであること，意味のちがいをあらわすのには無益な特徴であることを挙げてその理由を説明している。ハ行子音の[F]，四つ仮名の区別，動詞の二段活用型等のような多くの中世日本語が現在の九州方言にのこっていることについては既に指摘されたとおりであるが[7)]，このような大勢的流れの中からエ段音のみが独自の道を歩んできたとは考えにくいのである。九州方言のエ段音の口蓋化的要素が新しく形成されにくい環境にあったことはキリシタン資料の表す「ye」・「Xe」・「je」の口蓋性がまもなく消え去る運命にあった存在であったことを通しても間接的に窺い知ることができよう。

ローランド・ラング[8)]はキリシタン資料以前の中世日本語のエ段音がすべて口蓋音であったことを /e/＋/u/＞/joo/ のような拗長音の成立過程で口蓋半母音 /j/ が出現したこと，つまり口蓋半母音 /j/ が出現した原因をエ段音の音声的資質から求めようとしたのであるが，彼のこのような説明は中世日本語のエ段音の口蓋性を認める上で有利な論理的基盤を提供してくれる。若し，長音化の段階で「-eウ」類の/-e/の音声的資質が非口蓋音であったならば，「-eウ」類には

「-a ウ」類(/a/+/u/>/oo/)及び「-o ウ」類(/o/+/u/>/oo/)のような変化が予想される。しかし，予想に反して我々の耳にする変化の結果は，「-e ウ」類(/e/+/u/>/joo/)を「-i ヤウ」類(/i/+/ja/+/u/>/joo/)及び「-i ヨウ」類(/i/+/jo/+/u/>/joo/)と同一範疇に帰属させるが，この時，「-e ウ」類の/e/が口蓋音であるべき必然性が認められる。「-e ウ」類・「-i ヨウ」類・「-i ヤウ」類の三者の基底音から期待すべき共通分母は，やはり変化の結果として共有している口蓋的要素の/j/しか考えられないのである。「-e ウ」類に口蓋的要素を想定しなければ，このような変化は普遍的で一般的な音韻変化であるとはいえないであろう。

エ段音の口蓋性が認められる根拠[9]としてもう一つ考えられるのは「である」>「であ」>「ぢゃ」という変化であるが，この変化をもたらした要素もやはりエ段音「デ」に於ける口蓋半母音/j/と考えたほうが自然である。これはすべてのエ段音に口蓋性を帯びていたことで有名な九州各地で，「テ」にあたるところが［tʃe］或いは［tʃi］として発音されたこと[10]を想起してみれば，わかりやすい。

(B)は，キリシタン資料への盲信の危険性について指摘し，/e/に於ける口蓋性及び/o/に於ける唇音性の存在に疑問を抱く。確かにキリシタン資料の表すところだけを鵜呑みにするのはきわめて危険なことであり，短い時間の流れの中で，一つの音が消滅し，それが再び復活するという音韻現象も普通の音韻史から考えてみれば，正常な現象とは考えられない。しかし，このような一般論のみで国内外の各種の文献資料や方言資料などによる根拠を覆すことは無理を伴い，より実証的・具体的な根拠を提示しない限り，(B)の論理的立証は難しそうである。

以上のような理由でエ以外のエ段音の口蓋性については，それを認めたほうが穏当ではないかと考えられる。エ以外のエ段音の口蓋性を認める立場に立ち，原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記に口蓋的要素が含まれているという事実を考慮してみると，(C)の説明は説得力を持つ。しかし，(C)の説明には/-je/>/-e/という変化に於ける中間段階，つまり[-je]と[-e]との並存する段階を考えなかったので，日本語のエ段母音部を表すのに「-jɔi」・「-jɔ」の二つのハングル表記が表れる理由についての説明は看過されるのであるが，口蓋音から非口蓋音への変化過程に於ける［-je］と［-e］との並存期，つまり/-je/>/-e/ という変化の漸進的発達過程を包括する中間段階を設定することは重要である。口蓋音から非口蓋音への変化には［-je］と［-e］との並存期が存在したと考えるべきであろう。音韻史において或る音韻現象が発生して音韻上の変化が完了するまでには，①旧型　②旧型・新型の並存　③新型の成立と言う段階を経るのが一般的である。②の段階では旧型・新型とが勢力を争うようになるが，この過程で地域・年齢・階級などのような様々な要因により，その定着様相及び変化速度などを異にする。九州地方において，口蓋音であったエ段音の非口蓋音化が他地方より一層遅くなったこともこのような要因のためであろう。或る一つの音が変化するには②の段階は必ず予想され，またこのような段階での変化は或る瞬間に出来上がるものではなく，長期間にわたって徐々に行われる漸進性(gradualness)を持つ。日本語のエ段音の場合も長期間にわたって徐々に[-je]から[-e]へ，それもエ段音全体が一律的に同じ速度で変化したのではなく，各音節別に異なる様相を帯びながら変化していったと考えられる。

原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記については上記の(A)・(B)・(C)の外，大友信一[11]・杉戸清樹[12]・趙壩熙[13]等の説明も見られる。しかし，何れも(A)・(B)・(C)の限界を克服することはできず，「-jɔi」・「-jɔ」の二つのハングル表記が表れることやこれらが混用されることなどについての明快な解釈は見当たらない。「-jɔi」・「-jɔ」の二つのハングル表記が表れることやこれらが混用されることについては音韻変化の漸進的発達過程が考慮されてこそ，筋道の通る答えが得られそうである。本稿の出発となる理論的背景の多くは(C)の説明にあると言えようが，本稿では(C)の立場からは考えられなかった音韻変化の漸進的発達過程を包括する中間段階(②の段階)を考慮に入れて，原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記の問題を考えてみようとする。浜田敦[14]は，エのみならず，エ段音すべてを通じて「-jɔi」と「-jɔ」が区別なく混用されていることを挙げて，両者は恐らくそれぞれ異なる日本語音を写しているものではないと推論する。しかし，そうすると一つの日本語のエ段音に対して二様のハングル表記が対応する理由が明瞭でない。(B)・(C)の解釈の通り，「-jɔi」・「-jɔ」の二つの表記が一つの日本語の音(［-e］あるいは[-je])のみを表したものであれば，「-jɔi」・「-jɔ」表記のうち，一つだけで十分であろう。従来，二様のハングル表記については朝鮮南部方言に関係付けて考えようとしたことが主たる方向であったが，それの論理的正当性が裏付けられがたいことは前述のとおりである。やはり二様の表記「-jɔi」・「-jɔ」は日本語のエ段音が口蓋音の［-je］と非口蓋音の［-e］の二つの形で並存していたことを表したものととらえるべきではないかと考えられる。このように見るならば，「-jɔi」・「-jɔ」の混用表記はなんら問題にならない。原刊本が「-jɔi」と「-jɔ」をもって，エ段音に於ける/-je/>/-e/ という変化の中間段階を表したとすると，「-jɔi」と「-jɔ」が混用されるのは寧ろ当然のことであり，ゑど(江戸)：「'jɔin-to」原六17ウ・

「'jɔn-to」原六18ウ，しぜん(自然)：「si-zjɔin」原三22オ・「si-zjɔn」原五28オ等のような同一語に対する「-jɔi」・「-jɔ」の混用表記の問題も自然に解消される。これらは変化の中間段階で動揺していたものとして理解できよう。若し，日本語のエ段音が音声のレベルにおいて二つの変異音として区別されていたならば，二つのハングル表記が区別されて用いられるのは当然であるし，一つとして統一されていたならば，一つのハングル表記でそれを表せば十分であったはずである。資料を取り扱う際，「-jɔi」・「-jɔ」混用表記から先ず考えられるべきことは，朝鮮南部方言からの影響関係より，日本語側からの深度のある省察であろう。

三．司訳院の訳学書に対する転写態度

訓民正音の頒布(1446)以来，司訳院では中国語，日本語，蒙古語，女真語などのような外国語の発音をハングルで転写しようとする作業が行われたのであるが，もしこれらの外国語の発音に対応するハングルがない場合には，新たに独自の文字を作ったり，マークをしたりするなど様々な方法が用いられ，できるだけ正確に転写しようと努力された。例えば日本語の場合，原刊本の濁音表記のみを見ても，三様の方法[15]が取られている。語中・語尾の濁音表記の場合は，その直前の綴字の末尾にm•n•ŋのどれかを加えて表し，語頭の濁音表記の場合は，m•n•ŋを先行させて添えるべき前の綴字がないから，新しいハングル並書法を考案してm•n•ŋを一綴字の中に取り込んで表し，ザ・ジャ行の場合は当時は既に消滅していたzを甦らせて表したのがそれである。朝鮮語の音韻体系には有声音と無声音とが区別されないので，当時の日本語の清・濁音の区別を認識するには相当の苦労があったことが予想されるが，このように日本語の清・濁音の区別を自国の音韻体系の中から解釈しようとせず，それをそのまま的確に転写しようと色々と工夫を凝らしたことは注目すべきである。また，原刊本のウ段音表記に用いられた円唇的な「-u」表記が，改修本の段階ではサ(ザ)・タ(ダ)行に限って，非円唇的な「-ɯ」表記に改修されたこともこのような努力による結果であるといえよう。改修本の「-ɯ」表記は既に説かれているように[16]，日本人に意識されることのない差異が[ɯ]・[u]二つの母音の対立を持つ朝鮮人にして初めて意識され，表記し分けられたものであるが，これは日本語の転写の際，どれほど深く日本語を観察したのか察知するうえで，一つの尺度と考えることの出来る例である。

司訳院の外国語転写に臨むこのような転写態度及び水準を念頭におき，原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記がどのような日本語のエ段音を表そうとしたのかについてもう一度考えてみる時，二の(A)・(B)・(C)のような説明から答えを求めることは，躊躇され，寧ろ「-jɔi」と「-jɔ」を区別して考えたほうが自然さを感じさせる。「-jɔi」と「-jɔ」を同質のものと考えることの出来ない理由は，「-jɔi」と「-jɔ」が発音記号のような性格を持っていたことにもある。鄭光[17]の指摘の如く，司訳院訳書の発音転写に用いられたハングル表記は，訓民正音の正書法とは関係のない，一つの発音記号のような存在であったのである。一つの音声に二つの発音記号を対応させることは考えられないであろう。原刊本の日本語の転写がどういう原則に準じて行われていたのかということについてもう少し詳しく調べてみると，基本的にはphonetic transcription，つまり音声レベルでの転写が重視されたことが分かる。以下にいくつかその例を示す。

○タ行頭子音に対する「t」・「c」(「cc」)(タ行音のt口蓋化[18]と関連して)

たいめん(対面)：ta-'i-mjɔn(一7オ)，ていしゅ(亭主)：tjɔi-'i-sju(八7オ)，とうか(十日)：to-'u-kka(三24オ)，ちから(力)：ci-ka-ra(九13ウ)，つしま(対馬)：cu-si-ma(一18オ)，あいさつ(挨拶)：'a-'i-sa-ccu(一3ウ)

○ハ行頭子音に対する「h」・「ph」(ハ行音の唇音性の消失と関連して)

ふね(船)：hu-njɔ(二2ウ)，ほど(程)：hon-to(一31オ)，ひさひさ(久々)：phi-sa-phi-sa(十30ウ)，へんじ(返事)：phiɔn-zi(七1ウ)

○ンに対する「n」・「m」・「ŋ」(下に続く音節の音声的環境と関連して)

こんにち(今日)：kon-ni-ci(八26オ)，はんぶん(半分)：hoam-pun(四16オ)，ねんごろ(念此)：njɔŋ-ko-ro(一2オ)

○語末のツに対する「t」・「ccu」(入声と関連して)

きさつ(貴札)：ki-sat(十5オ)，ひつ(筆)：pit(十3オ)・pi-ccu(十6オ)，あいさつ(挨拶)：'a-i-sa-ccu(一3ウ)，しゃべつ(差別)：sya-pjɔ-ccu(八4オ)

○テウに対する「tjo-'u」・「cjo-'u」(タ行オ段拗長音のt口蓋化と関連して)

てうせん(朝鮮)：tjo-'u-sjɔn(五15オ)・cjo-'u-sjɔn(三15ウ)，むてうはう(無調法)：mu-tjo-'u-ho-'u(六10ウ)・mu-cjo-'u-ho-'u(六18ウ)

○ザ行頭子音に対する「n-z」・「z」(鼻濁音と関連して)

わざと：'oan-za-tto(八5ウ)・'oa-za-to(七6オ)，のぞみて(望)：non-zo-min-tjɔi(八24オ)・no-zo-min-tjɔi(六5オ)

以上の幾つかの場合からも分かるように，一つの音韻に対する複数のハングル表記はそれぞれ異なる日本語の音声を表したもので，原刊本に於ける個々のハングル表記はその使い方に区別があったと考えられる。

エ段音に対する「-jɔi」・「-jɔ」表記のみが原刊本のこのような転写原則から除外されることは受け入れがたい。当時の朝鮮語の音韻体系に於いても，「-jɔi」・「-jɔ」の音価はたがいに類似してはいるが，[-jɔi]と[-jɔ]のように三重母音と二重母音という明らかな違いがあり，ハングルの使い方においても確かにその使い分けがあったにもかかわらず，日本語の一つの音を表すのに二つのハングル表記が用いられたとは考えられないのである。

四.『捷解新語』のエ段音表記

原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記について分析してみると，ネ以外のエ段音節には「-jɔi」表記が圧倒的に多く使われているが（音節末音がNである用例を除けば，ほぼ90%），ネの場合は169用例のうち154用例(91%)に「-jɔ」表記が使われており，非常に対照的である。このように「-jɔi」・「-jɔ」表記がある特定の音声環境で互いに相反する使用比率を見せているのは，「-jɔi」・「-jɔ」表記がそれぞれ区別されて，その使い方を異にしていたということを端的に表す現象ではないかと考えられる。「-jɔi」と「-jɔ」を同質のものと考えれば，特定の音声環境で互いに相反する使用比率を見せる「-jɔi」と「-jɔ」表記の偏重現象は期待しがたく，このような偏重を見せるべき理由も不分明である。ネに対する「-jɔ」表記の偏重現象については，既に金完鎭[19]が「-jɔi」と「-jɔ」が区別される，つまり「-jɔ」の表れる音声的条件として音節頭音及び音節末音をnにする場合を挙げて説明し，以後趙堈熙[20]は「-jɔi」・「-jɔ」表記を字音語と非字音語に分けて分析し，字音語は_N，非字音語はn_という条件を挙げて説明しようとした。しかし，何れも「-jɔ」表記が登場する音声的条件を中心に説かれているのみで，「-jɔi」・「-jɔ」の混用表記が登場する理由やそれらの働きなどのような問題の核心というべきところまでには説明が届いていないといえよう。このような音声的条件のみでは，江戸:「'jɔin-to」（原六17ウ）・「'jɔn-to」（原六18ウ），自然:「si-zjɔin」（原三22オ）・「si-zjɔn」（原五28オ），天気:「tjɔin-kki」（原二3ウ）・「tjɔn-ki」（原五12ウ）等のような同一語に対する混用表記，ネに対する「-jɔi」表記，音節末音にNを含む語に対する「-jɔi」表記などについては説明のしようがない。原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」の混用表記についての筋道の通る説明のためには，二様の表記「-jɔi」・「-jɔ」は日本語のエ段音が口蓋音の[-je]と非口蓋音の[-e]の二つの形で並存していたことをそれぞれ区別して表したものと考える必要があるということについては前述したとおりであるが，このように考えると，上記の諸問題についても自然に説明がつく。口蓋音の[-je]と非口蓋音の[-e]とが並存する段階，つまり/-je/ >/-e/ という変化の中間段階には音韻変化の漸進性(gradualness)が認められようが，この漸進性は二つの側面からのそれが考えられる。一つは語彙的拡散に於ける漸進性であり，もう一つは音声的漸進性である[21]。簡単にいえば，音韻変化は音声変化から始まり，音声変化は語彙的拡散によって勢力を拡大し，勢力を拡大した音声変化は音韻変化に帰着するようになるが，この時，其々の変化は急進的であるというより，漸進的な発達過程を経るということである。/-je/>/-e/という変化がこのような発達過程を経験し，これが原刊本のハングル表記に反映されているとすれば，ネ以外のエ段音節には「-jɔi」表記が，ネには「-jɔ」表記が圧倒的に多く使われていることから，原刊本の日本語のエ段音は，漸進的語彙拡散の段階にあり，この段階においては音節頭音をnに(または音節末音をNに)する語彙が変化の先駆けとなっていたことがわかる。同一語に対する混用表記，ネに対する「-jɔi」表記，音節末音がNでない用例に対する「-jɔ」表記などの場合は，語彙拡散の発達過程に於ける揺れがハングル転写に反映された形として解釈することが出来よう。語彙的拡散は音声的に同一条件を有する全ての語彙に一時に一律的に適用されず，一定の時間的範囲の中で漸進的で差別的に適用されるのが一般的であろう。ネに対する「-jɔ」表記の偏重現象についてもこのように考えてこそ筋道が通るのではないかと考えられる。

『捷解新語』の原刊本から改修本への改修過程でもっとも目立つのは，原刊本で「-jɔ」で転写された多くの用例(江戸，船頭，分別など)が改修本では「-jɔi」に整理され，「-jɔi」表記の使用比率が原刊本より改修本で一層高くなった点である。しかし，だからと言って，すべての「-jɔ」表記が「-jɔi」表記に整理されたということではない。一部では逆に原刊本で「-jɔi」表記で転写された用例が，改修本で「-jɔ」表記に整理された場合(宴席，対面)もある。このように原刊本の「-jɔ」表記の用例が改修本で「-jɔi」表記になったり原刊本の「-jɔi」表記の用例が改修本で「-jɔ」表記になったりするのはいったい何を意味するのであろうか。それは改修者達の意図によって，原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記が語彙別に新たに整理されたものと見られるが，このような整理作業自体は，結局「-jɔi」と「-jɔ」の二つの表記が互いに異なった使い方を持っていたため行われたのではないかと考えられる。若し，「-jɔi」・「-jɔ」表記が一つの日本語の音([-je]あるいは[-e])のみを表したものであれば，日本語のエ段音を表すうえで「-jɔi」表記が使われたとしても，また「-jɔ」表

記が使われたとしても，そこには何ら問題もないし，また「-jɔi」・「-jɔ」のうち「-jɔi」表記のみが圧倒的に使われる理由もない。従って「-jɔi」・「-jɔ」表記も敢えて片方に整理する必要もなくなる。そして改修過程で原刊本の多くの「-jɔ」表記の用例が改修本で「-jɔi」表記に整理されたにもかかわらず「-jɔ」表記は依然として改修本で使われているが，これは結局，「-jɔ」表記の必要性を認める部分で，これを通しても「-jɔi」・「-jɔ」表記がその使い方を異にしていたことを間接的に推測することができる。

日本語史の研究に『捷解新語』が用いられる際，それが日本語の教科書であったということに注意しなければならないことについては，既に多和田眞一郎[22]によって指摘されたとおりであるが，このような『捷解新語』の教科書的側面，すなわち教育的側面から考えてみても，当時の日本語のエ段音母音部が一つの音（[-je] あるいは [-e])に発音されていたとすれば，二つのハングル表記が出てくる理由はない。それはかえって学習者を混乱に陥れるのみである。たとえ，エ段音に [-je] と [-e] が並存していたとしても，これらの二つの音は意味の区別に関係しない異音関係にあるため，これらをそれぞれ区別して表すより，これらと類似している一つの音のみを選んで表記したほうが教育上一層効率的であろう。

『捷解新語』のエ段音表記の改修に関連してもう少し説明を加えなければならないことは重刊本のエ段音表記に関する問題である。『捷解新語』原刊本・改修本での二様のハングル表記「-jɔi」と「-jɔ」は重刊本では「-jɔi」のほうに統一され，改修本の「-jɔ」の姿は完全に消えてしまい，問題となるが，これは「-jɔ」に対応させられてきた日本語のエ段音の消滅と関係付けて考えるより，改修者たちの意図によってそれが「-jɔi」表記の中に塗り込められた結果と解した方が自然である。重刊本では日朝両国語の変化に起因する改修本の矛盾を修正すると共に，phonetic transcription の原則によって前代から複雑であったハングル表記の整理作業も並行されたが，エ段音に対するハングル表記の場合は後者に属するものと考えられる。重刊本の統一性(均質性)については既に説かれたところであるが[23]，「-jɔi」・「-jɔ」が重刊本で「-jɔi」に統一されたことも，このような統一性(均質性)を確保するための努力の一環として考えられよう。重刊本に於けるハングル表記の統一意識はタ行オ段拗長音の「テウ」類に対する二様の「tjo-'u」・「cjo-'u」表記を通しても窺うことができる。「テウ」類に対するハングル表記はエ段音の場合と同様に，原刊本・改修本では「tjo-'u」と「cjo-'u」とが混用されるが，重刊本では「tjo-'u」のほうに統一される。「テウ」類に対して「tjo-'u」・「cjo-'u」の二様のハングル表記が表れることからは，「テウ」類に対応する [tʃoː] の前段階の音価は [tjoː] であったこと[24]，原刊本・改修本での「テウ」類は [tjoː] と [tʃoː] の間で動揺していたことなどがわかる。「tjo-'u」と「cjo-'u」の混用表記は，音韻変化において旧型と新型とが並存する段階で phonetic transcription が重視され，両方の発音がそのまま記録されたものと解していいであろう。ところが，「テウ」類に対応する「tjo-'u」・「cjo-'u」の混用表記の割合は，原刊本で延べ24:15，改修本で延べ37:2となっており，原刊本・改修本の段階では「tjo-'u」([tjoː])の方が優勢である[25]。従って，重刊本で「cjo-'u」表記が姿を消したのは，[tʃoː] が発生してから間もなく消滅したものと考えるよりは，エ段音の場合と同様に phonetic transcription より表記の統一性(均質性)の確保が強調され，勢力の優勢であった「tjo-'u」の方に表記の統一が行われた結果と考えるべきである。「テウ」類の変化が [tʃoː] に終結されたことを考慮に入れるとき，[tʃoː] の消滅は考えられない。

以上のように，『捷解新語』に於ける「テウ」類のハングル表記は，本稿の考察対象であるエ段音のハングル表記の場合と非常に類似した様相を見せていることがわかるのであるが，このような事実は，『捷解新語』のエ段音表記の問題を考える上で，「-jɔi」・「-jɔ」表記を「tjo-'u」・「cjo-'u」表記に投影して考えることを可能にすることで，エ段音表記の実体について間接的に接近できる機会も提供してくれるのである。一つのエ段音を表すため二様の「-jɔi」・「-jɔ」表記が用いられたと考えにくいことは，二様の「tjo-'u」・「cjo-'u」表記が「テウ」類に対応する [tjoː] と [tʃoː] のうち，一つの音のみを表すために用いられたと考えにくいことと相通じるといえよう。

五.『倭語類解』のエ段音表記

『倭語類解』の日本語エ段音のハングル表記はテ・ネに「-ɔi」が[26]，その他の音節には「-jɔi」が用いられており，『捷解新語』では見られなかったハングル表記の「-ɔi」が新たに表れている。このテ・ネに対する「-ɔi」表記についての研究は，「倭語類解考」[27]の解釈以外には殆ど見当たらず，それが今日まで定説として考えられてきた。「倭語類解考」では，日本語のエ段音節のテ・ネに対する『倭語類解』「-ɔi」表記を，朝鮮語史におけるt口蓋化現象とn脱落現象，つまり非口蓋子音の[t]と[n]が後続する口蓋母音[i](および口蓋半母音[j])の影響で，それぞれ[t]の場合は

[tʃ] となったり，[n]の場合は脱落したりする現象を避けるため登場したものとして把握する。要するに，テ・ネの母音部に他のエ段音と等しく「tjɔi」・「njɔi」表記が使われたら，[te]・[ne] を表し得ず，「cjɔi」・「'jɔi」表記と同一な音で発音される可能性があるゆえ，その混同を避けるため「-jɔi」表記の代わりに「-ɔi」表記が登場したのではないかと解釈しているのである。

しかし，このような考え方については疑問が残る。司訳院の外国語転写におけるハングル音注は今日の発音記号のような存在であったため，自国語の音韻現象がそこに影響を与えうる可能性は低いのである。外国語転写に用いられたハングル音注は朝鮮語の文字表記として用いられたハングルとは区別されるべきである。司訳院の外国語転写において，自国語の音韻現象の干渉は厳格に排除されるべきことであり，何より肝心なことは，自国の音韻現象が外国語の転写に如何なる影響を及ぼすかということより，自国語に外国語音をそのまま転写し得る音声や表記があるかどうかということであろう。[t] と [i] 及び [j] との結合が完全に消滅して，他に日本語のテを表すべき朝鮮語の音声や表記がなかったため，テに対する「-ɔi」表記を必要としたならともかく，朝鮮語のｔ口蓋化現象の干渉により，「tjɔi」が「cjɔi」の如く読まれる恐れがあるという理由のみで，従来の「-jɔi」表記の代わりに「-ɔi」表記が用いられたとは容易に考えられないのである。『倭語類解』当時の朝鮮語におけるｔ口蓋化がかなり進んでいたことは否めないが，だからといって，全ての「ti」・「tj-」が [tʃ] となったとは言えないであろう[28]。

なお，「倭語類解考」では，ネの場合は，後続する口蓋母音 [i] 及び口蓋半母音 [j] の影響で [n] が脱落する現象を避けるため，「-jɔi」表記の代わりに「-ɔi」表記が用いられたとするが，このような解釈に従えば，当然のことながら，ネに対する「-ɔi」表記のみならず，ニに対する「ni」表記についても一貫した説明を加えなければならない。「-ɔi」表記がｎ脱落現象を避けるために登場したならば，ニについても同種の工夫が考えられるべきであろう。しかし，これについての説明を求めるのは容易ではない。また，ｎ脱落現象の発生時期が考慮されるとき，このような解釈は更に信頼し難くなる。一般的に韓国語学界ではｎ脱落現象の時期を十八世紀末頃からと考えている。李基文[29]は十八世紀末頃のいくつかの用例から始まり十九世紀に入って一般化したと考えており，許雄[30]も十八世紀末頃から十九世紀初め頃としてその時期を推測している。このような事実は十八世紀末頃の文献である『捷解新語』重刊本や『倭語類解』からも確認することができる。『倭語類解』では，考察上の見逃しの恐れがないわけではないが，ｎ脱落現象の例を見出すことはできなかった。そして，辻星児[31]の分析からも，ｎ脱落現象の例は『捷解新語』原刊本・改修本・重刊本を通して，改修本での１例（「nir-rɔ」＞「'ir-rɔ」（申し，八-３ウ））しか見られないのである。この例をｎ脱落現象の例として認めるか，誤記として扱うかという問題もありそうであるが，ここでは一応重刊本でｎ脱落現象の例が見られなかった点に注目したい。

然らば，朝鮮資料の日本語のエ段音表記において最初に「-ɔi」のような表記が登場したことを如何に考えるべきであろうか。本稿では，「-ɔi」表記の新しい登場は，朝鮮語史上における二重母音「-ɔi」([-ɔi])・「-ai」([-ai])の単母音化，つまり単母音[ɛ]・[e]の形成によるものと考えたい。従来，『倭語類解』の「-ɔi」表記と朝鮮語における二重母音の単母音化とを結び付けて考えられなかった理由は，『倭語類解』が十八世紀初期の資料として扱われてきたためであるが，『倭語類解』を十八世紀末期の資料として考えなければならないこと[32]，朝鮮語史において単母音[-e]の成立する時期が十八世紀末頃であること[33]などを考慮に入れるとき，『倭語類解』「-ɔi」表記については，新しい解釈を加えなければならない。日本語のエ段音を表す上で，もっとも相応しい [-e] が朝鮮語に新たに成立したなら，これが表記において新たに登場するのはごく自然の流れであろう。許雄[34]は以前から原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記に関して，「当時の朝鮮語の母音体系に単母音 [e] が存在していなかったので，日本語のエ段音を表すため，これと類似している「-jɔi」([-jɔi])・「-jɔ」([-jɔ]) が代わりに使われたのだが，もし当時[e]のような単母音があったら，当然「-ɔi」表記で日本語のエ段音を表したであろう」と述べている。許雄のこのような説明は，裏返して考えてみれば，日本語のエ段音をハングルで表すために朝鮮資料に「-ɔi」表記が新しく登場したことは，結局朝鮮語に単母音 [-e] が成立したことを意味するとも解釈できるであろう。

以上のことによれば，『倭語類解』の「-ɔi」表記は単母音 [-e] を表したものと考えてよさそうである。『倭語類解』のエ段音表記には，テ・ネに「-ɔi」表記が，その他のエ段音節には「-jɔi」表記が使われているが，このように「-ɔi」の音価を [-e] として見れば，「-jɔi」も今は三重母音の [-jɔi] ではなく，二重母音の [-je] として見なければならない。従って『倭語類解』のテ・ネは [te]・[ne]，その他のエ段音節は [je]・[kje]・[sje]・・・などのような音であったことが推測できるのである。また，テ・ネに限って「-ɔi」のように表記されたことは，テ・ネのみが [te]・[ne] のような非口蓋音で発音されていたこ

とを表すことで，これを通して『倭語類解』に反映された日本語のエ段音は非口蓋音化の段階にあったということも分かる。『倭語類解』の日本語のエ段音が非口蓋音化の過程にあったと言うことを考え合わせると，その前代に成立した『捷解新語』に反映された日本語のエ段音もこのような非口蓋音化過程にあったことが予想される。このような非口蓋音化は，変化がある瞬間にできあがるのではなく，長期間にわたって徐々に，並存期を経てできあがるという音韻変化の漸進性を有するためである。従って『倭語類解』と同じく，『捷解新語』の段階でも［-je］と［-e］が並存していた可能性は十分にあり，これを区別するため，二つのハングル表記「-jɔi」・「-jɔ」が登場したことも十分に考えられるのである。

『捷解新語』原刊本のエ段音表記には「-jɔi」と「-jɔ」が全体的に混用されているのであるが，ネに対してのみ，特に「-jɔ」表記が圧倒的に多い。ところが『倭語類解』では，テ・ネだけに「-ɔi」を使い，その他の音節には「-jɔi」が使われている。ここで我々は原刊本でのネに対する「-jɔ」表記と，『倭語類解』でのネに対する「-ɔi」表記が決して無縁でないことに気付くようになる。つまり『倭語類解』の「-ɔi」表記は，原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記のうち，「-jɔ」の働きを受け継いだものではないかと考えられるのである。換言すれば，原刊本の段階では，朝鮮語において単母音の［-e］がなかったため，日本語の［-e］を表すのに，それと類似しているハングル表記の「-jɔ」を使ったのであるが，以後，『倭語類解』の段階では二重母音の非口蓋音化が進んで［-e］が存在していたため，「-jɔ」の代わりに「-ɔi」表記が登場したと考えられるのである。若し，このように原刊本のネに対する「-jɔ」表記の偏重現象と『倭語類解』のネに対する「-ɔi」の登場とを結び付けて考えることが許されるならば，これを通しても，原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記は，日本語のエ段音の［-je］と［-e］とをそれぞれを区別して表したものであるという推定は可能となる。

六．おわりに

以上，日本語のエ段音が口蓋音の［-je］と非口蓋音の［-e］の二つの形で並存していたことを，原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」がそれぞれを区別して表した可能性などについて考え，その可能性に対する裏づけとして幾つかの根拠も提示してみた。以上の内容に基づけば，原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」表記は日本語のエ段音が［-je］・［-e］の二つの形で並存していたことを表したものと考えてさほど無理はなさそうで，「-jɔi」:［-je］，「-jɔ」：［-e］という対応関係も考えられよう。

ところで，一つ問題になるのは，『捷解新語』・『倭語類解』などのような朝鮮資料に記されているエ段音のハングル表記が，いつ頃のどこの方言のエ段音を反映しているのかということである。この問題については慎重を期すべきで，判断に躊躇を感じるが，以上の考察結果，つまり『捷解新語』・『倭語類解』のエ段音表記の非口蓋音化がかなり遅れていたということに立脚すれば，やはりキリシタン資料以後の京阪地方の方言と関係付けて考えるより，九州方言と関係付けて考えるべきである。朝鮮資料のエ段音表記を，キリシタン資料以後の京阪地方の方言と関係付けて考えようとすると，以上の考察結果から得られた『捷解新語』・『倭語類解』の表す日本語のエ段音か，キリシタン資料の表す日本語のエ段音かの内で，一方が否定されなければならない。しかし，一方を重視し，他方を疎略にすることはできない。原刊本の「-jɔi」・「-jɔ」や『倭語類解』の「-jɔi」・「-ɔi」をキリシタン資料の表すエ段音に合わせて無理に解釈しようとしたときの矛盾については既に述べた通りである。キリシタン資料の資料としての体系及び一貫性，量的豊富さなどから考えれば，キリシタン資料の方を全面的に否定することもできない。すると，残るのは九州方言と関係付けて考えることであろうが，『捷解新語』・『倭語類解』のエ段音表記の非口蓋音化が遅れた理由は，やはりここにあったのではないかと考えられる。今日の九州地方に於けるエ段音の非口蓋音化速度を計算に入れて十七・十八世紀まで遡っていけば，当時の九州方言のエ段音は，『捷解新語』・『倭語類解』の表す日本語のエ段音に相当する程度であったことは容易に考えられよう。朝鮮資料のエ段音表記と九州方言との関連性が認められれば，『捷解新語』・『倭語類解』の表す日本語のエ段音とキリシタン資料の表す日本語のエ段音との食い違いは自然に解消され，『捷解新語』のエ段音表記にかかわる全ての問題は，本稿で提示された方法で無理なく説明できる。朝鮮資料のエ段音表記と九州方言との関連性についてはより精密で実証的な研究で裏付けなければならないが，朝鮮資料と九州方言との関連性について従来しばしば指摘されてきたことは周知の事実であり[35]，可能性としては十分に考えられよう。以上の他，もう少し想像をたくましくすれば，キリシタン資料の前段階に口蓋音として存在していた日本語のエ段音が最初『伊路波』(1492)などに書き写され，それが規範的な形として，保守的表記の伝統に助けられ，そのまま後代に受け継がれたことも考えられる。しかし，この場合も九州方言の存在を背景にしなくては考えられない。仮に九州方言のエ段

音の非口蓋音化が京阪地方のそれと同じ速度で行われたとしたら，タ行やハ行などの場合と同じく，それはハングル表記に反映されるべきである。いくら規範意識が強調されてもそれの及ぼす範囲には限度があるためである。若し，『捷解新語』や『倭語類解』などの朝鮮資料のエ段音表記がこのような規範意識によるものであれば，地理的にもっとも近い九州地方のエ段音の口蓋性に支えられたことは間違いなく，多かれ少なかれ九州方言の影響を受けたことも予想される。若しかすると，この二つの要因，つまりエ段音表記に対する規範意識と当時の九州地方のエ段音に口蓋性が健在であったことが働き合ったことによるものかもしれない。この問題についてはこれ以上深入りはしないことにするが，朝鮮資料のエ段音表記の問題を考える上で，九州方言との関連性は十分に考慮されるべきであると考えられる。

日本語のすべてのエ段音節がキリシタン資料の前段階に一時口蓋音として存在していた可能性については既に述べたとおりであるが，最後に，本考察から得られた結果をもってエ段音の口蓋性の消失過程について若干の説明を付け加えることにする。原刊本のネに対して「-jɔ」表記の偏重が見られることから，口蓋性を帯びていたエ段音の非口蓋音化はネから起こりはじめたと考えられる。そして『倭語類解』のエ段音表記がテ・ネのみに限って「-ɔi」表記が用いられている点から，原刊本の段階での非口蓋音化はネのほうが優勢であったが，『倭語類解』の段階ではこれがテまで拡大して行ったと推測することができる。日本語のエ段音がテ・ネから一番先に非口蓋音化が始まった音声的要因としては口蓋化現象を挙げることができる。口蓋化とは先行する非口蓋子音(一般的に[t]・[n]・[s]・[r]等のような歯茎音)が口蓋母音[i]や口蓋半母音[j]の影響を受けて口蓋子音に発音されることを意味する。[t]・[n]に[i]及び[j]が続く音声条件で口蓋化が起こりやすいということは，朝鮮語の口蓋化例からも検証されたことであり，日本語のチの口蓋化からも確認できよう。すると，タ行のチに於ける[t]>[tʃ]という変化の流れの中で，頭子音に歯茎音を持つテ([tje])・ネ([nje])の位置が相当不安定であったということは容易く考えられる。したがってテ・ネの頭子音の[t]・[n]は他の口蓋音に変化するか，それとも後の母音の口蓋的要素を無くすかと言うような選択をしなければならない状況にあったかもしれない。テ・ネから非口蓋音化現象が進んだのは，このような状況で後者の場合が選択された，すなわち母音部の口蓋的要素の[j]が無くなったためではないかと考えられる。もし前者の場合が選ばれたら，テの頭子音はチの場合と同じく[tʃ]への変化が予想され，ネの頭子音は朝鮮語の場合と同じく[n]の脱落，もしくは他の口蓋子音への変化が予想されるのであるが，そうすると当時の日本語の音韻体系に大きな混乱をもたらすようになる。ネが朝鮮語の場合のように，頭子音の[n]が脱落して[je]になれば，母音エ([je])と同一の音価になってしまう。また，テの場合もテ([tje])が[tʃe]になれば，テの濁音のデとセの濁音のゼとが類似音になり問題となる(実際，このような変化例は九州方言から確認される[36])。そこでこのような混乱を避けるため，後者の場合が選ばれたのではないか考えられるのである。

一方，日本語のエ段音において非口蓋音化が一番遅れたものとしてはエ・セ(ゼ)が挙げられよう。これはキリシタン資料の「ye」・「Xe」([ʒe])表記から確認することができる。キリシタン資料の表記によれば，セ(ゼ)の頭子音の場合は既に[ʃe]([ʒe])のように口蓋化され，安定した音声条件にあったことがわかるが，セ(ゼ)の非口蓋音化の遅れた原因は，このような音声的安定性から求めることができよう。キリシタン資料の表記によれば，シも[ʃi]のような口蓋音として発音されていたのであるが，これが現代日本語にまで至っていることを考慮すれば，セ(ゼ)の音声的安定性については首肯できる。エの非口蓋音化の遅れたことも，エの有する音声的安定性に原因を求めることができよう。エの場合は頭子音を持たないため口蓋半母音の[j]との摩擦が避けられたが，これによって音声的安定性を保持することができたのである。すると，このように音声的に安定していたにもかかわらず，エ・セ(ゼ)はどうして非口蓋音化の道を歩むようになったのかということが疑問とされるかもしれないが，これは他行のエ段母音部との均質性を確保するための努力の結果として理解される。

【注】

1）ハングルのローマ字転写は，多和田眞一郎(1997)による。
多和田眞一郎(1997)『外国資料を中心とする沖縄語の音声・音韻に関する歴史的研究』武蔵野書院

2）森田武(1957)「捷解新語解題」『捷解新語』京都大学国文学会
森田武(1973)「捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都大学国文学会

3）浜田敦(1952)「弘治五年朝鮮版『伊路波』諺文対音攷－国語史の立場から－」『国語国文』21-10
浜田敦(1983)『続朝鮮資料による日本語研究』臨川書店 pp.16-38

4）ローランド・ラング(1971)「文献資料に反映した中世日本語エ列音節の口蓋性」『国語学』85
Cho, Seung-Bog (1970) "A Phonological Study of Early-Modern Japanese on the Basis of the Korean Source-materials". Almqvist wiksell. Uppsala

5）崔銓承(1986)『十九世紀後期 全羅方言의 音韻現象과 그 歴史性』翰信文化社(Korea)pp.230-231

6）亀井孝外(1964)『日本語の歴史 4移りゆく古代語』平凡社 pp.307-308

7）亀井孝外(1964)『日本語の歴史 4移りゆく古代語』平凡社 pp.315-316

8）ローランド・ラング(1971)「文献資料に反映した中世日本語

エ列音節の口蓋性」『国語学』85

9）柳田征司は沖縄方言の三母音化傾向を説明しうるということを挙げて中世日本語のエ段音は口蓋音であったと推定しているが，詳細は柳田征司(1993)に譲る。
柳田征司(1993)『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院 p.1007

10）九州方言学会(1969)『九州方言の基礎的研究』風間書房 pp. 200-270

11）「'ye は [je]，'yə は [e] に応ずる」とした大友信一の指摘は注目に値するが，このような対応関係は「ゑ」に限定されるのであり，その他のエ段音節に於ける「-jɔi」と[-je]，「-jɔ」と[-e]という対応関係にまでは説明が至っていない。
大友信一(1957)「捷解新語による国語音の研究」『文化』11-4 東北大学文学部

12）杉戸清樹(1989)「原刊『捷解新語』のエ段音節母音部への音注について」『野村正良先生受章記念言語学論集』野村先生受章記念刊行会

13）趙堈熙(2001)『朝鮮資料による日本語音声・音韻の研究』제이엔씨(Korea) pp.100-136

14）浜田敦(1952)「弘治五年朝鮮版『伊路波』諺文対音攷－国語史の立場から－」『国語国文』21-10

15）森田武(1957)「捷解新語解題」『捷解新語』京都大学国文学会
森田武(1973)「捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都大学国文学会

16）安田章(1987)「捷解新語の改修本」『国語国文』56-3
安田章(1991)「改修捷解新語解題」『改修捷解新語』太学社(Korea) p.30

17）鄭光(1979)「司訳院訳書の外国語の発音転写に就いて」『朝鮮学報』89

18）厳密にはｔ破擦音化というべきであるが，説明の便宜上，ここでは広い意味でのｔ口蓋化と称することにする。

19）金完鎭(1963)「国語母音体系의新考察」『震檀学報』24(Korea)

20）趙堈熙(2001)『朝鮮資料による日本語音声・音韻の研究』제이엔씨(Korea)pp.100-136

21）Wang(1969)は語彙的拡散(lexical diffusion)に於ける漸進性を認めており，Lass(1984)は音声変化(sound change)に於ける音声的漸進性を認めている。
Wang, W. S-Y(1969), "Competing change as a cause of residue". Language45
Lass, R.(1984), Phonology: An Introduction to basic concepts. Cambridge: Cambridge University Press. p.328

22）多和田眞一郎(1997)『外国資料を中心とする沖縄語の音声・音韻に関する歴史的研究』武蔵野書院 pp.523-524

23）安田章(1987)「捷解新語の改修本」『国語国文』56-3

24）森田武は，ロドリゲスが，chô，giô はｃに少しく触れて TD に発音すべきだとし，chô，giô，chôzu，chôfô は，Teô，deô，Teôzu，Theôfô，Teôfô と発音するのが正しいと述べたことを指摘し，原刊本の「tjo-'u」表記をロドリゲスのこのような記述に関係付けて考えている。
森田武(1957)「捷解新語解題」『捷解新語』京都大学国文学会
森田武(1973)「捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都大学国文学会

25）「必定」・「乱潮」・「調儀」・「招請」の場合は，「ヒツ<u>ヂヤウ</u>」・「ラン<u>テウ</u>」・「<u>テウ</u>ギ」・「<u>テウ</u>シヤウ」であるべきものが「ヒツ<u>デウ</u>」・「ランチヤウ」・「チヤウギ」・「チヤウセウ」となっており，仮名遣の混同の問題も残るので，加算しない。

26）『倭語類解』のネに対する数例の「-jɔ」表記とメに対する一例の「-jɔ」表記については，単なる誤謬として考えることもできるであろうが，それなりの問題も残るので，一先ずここでは論外とする。

27）土井洋一・浜田敦・安田章(1959)「倭語類解考」『国語国文』28-9

28）十八世紀末頃の文献資料によれば，朝鮮語におけるｔ口蓋化は未だ完了していないようである。白應鎭(『韓国語歴史音韻論』도서출판박이정(Korea) p.268)は『捷解新語』重刊本での非口蓋化表記例を挙げて，これは十八世紀にｔ口蓋化が完成されていないことを証明すると述べる。非口蓋化表記例は『捷解新語』重刊本のほか，『倭語類解』・『方言類釈』などからも多数確認されるのであるが，このような非口蓋化表記例から推して見れば，音声のレベルでは [t] と [i] 及び [j] の結合が十八世紀極末葉までは依然として実際に発音されつつ，話者にはある程度認識されていたようである。これが裏付けられるもう一つの根拠としては十九世紀に入って起った/tɯi/>/ti/というɯ脱落現象が挙げられよう。ɯ脱落現象の例としては「can-tɯi」>「can-ti」(芝 生)，「ma-tɯi」>「ma-ti」(節)，「mu-tɯi-ta」>「mu-ti-ta」(鈍い)等が挙げられるが，これらは [t] と [i] 及び [j] の結合を背景にしないと，起り得ない音韻現象であろう。つまり，ｔ口蓋化により，[t] と [i] 及び [j] の結合が話者の認識から完全に消滅していたならば，それを甦らせることは考えられないのである。

29）李基文(1998)『新訂版国語史概説』太学社(Korea) p.209

30）許雄(1985)『国語音韻論』正音社(Korea) p.494

31）辻星児(1988)「戊辰版『改修捷解新語』の朝鮮語について-その表記・音韻を中心に-」『岡山大学文学部紀要』10

32）ここで一々述べることはできないが，日朝両国で『倭語類解』が，従来多くの場合，『通文館志』の記録を拠りどころにして十八世紀初期の資料として扱われてきたことは事実である。しかし，『倭語類解』は刊行当時，つまり十八世紀末期の資料として扱うべきではないかと考えられる。これに関連して，安田章は「従来，『倭語類解』は，刊行期の未詳のまま，洪舜明編纂ということの関連で，彼の活動時期として『通文館志』にその干支の記された，康熙辛巳(一七〇一年)から己丑(一七〇九年)の前後をそれほど距ることのない十八世紀初葉の言語資料として処理されて来たのが実情である。(　中略　)しかし，成立の経緯はさておき，言語資料として，『倭語類解』の，讐整される以前の写本でなく，刊本を用いる以上，厳密には刊行期たる十八世紀の極末葉のものとして見なければならないであろう。」と指摘している。そして宋敏は，十八世紀前期の他の朝鮮語文献より『倭語類解』の方がｔ口蓋化の例を多量に見せている点，『方言類釈』では日本語のハに対して hoa・ha の二様であったハングル表記が『倭語類解』では ha に統一されている点等を挙げて，『倭語類解』を『方言類釈』成立以後，即ち一七七八年以後の資料として考えている。また，郭忠求も，「朝鮮語の口蓋化の発生時期を論じるにおいて常に十八世紀初期の資料として『倭語類解』がよく用いられたが，その前後の他の朝鮮語文献に比べて『倭語類解』では，あまりにも急進的な変化例を見せている」と述べ，宋敏の解釈に従っている。
安田章(1978)「『方言集釈』小考」『朝鮮学報』89
宋敏(1968)「『方言類釈』의日本語ハ行音転写法과『倭語類解』의刊行時期」『李崇寧博士頌寿記念論叢』(Korea)
郭忠求(1980)「十八世紀 国語의音韻論的研究」『国語研究』43(Korea)

33）李基文(1998)『新訂版国語史概説』太学社(Korea)pp.122-123
金完鎭(1963)「国語母音体系의新考察」『震檀学報』24(Korea)
郭忠求(1980)「十八世紀 国語의音韻論的研究」『国語研究』43(Korea)
宋敏(1975)「十八世紀前期韓国語의音韻体系」誠心女子大学論文集 6 (Korea)
李崇寧(1988)『李崇寧国語学選集－音韻編－』民音社(Korea) pp.352-355

34）許雄(1985)『国語音韻論』正音社(Korea)pp.381-382

35）亀井孝(1958)「『捷解新語』小考」『一橋論叢』39-1
土井洋一・浜田敦・安田章(1959)「倭語類解考」『国語国文』28-9
岡上登喜男(1970)『捷解新語とその改修本』群馬工業専門学校国語科研究室 pp.44以下
ローランド・ラング(1971)「文献資料に反映した中世日本語エ列音節の口蓋性」『国語学』85
森田武(1973)「捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都大学国文学会
安田章(1973)「重刊改修捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都大学国文学会
柳田征司(1993)『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院 pp.1005-1007

36）九州方言学会(1969)『九州方言の基礎的研究』風間書房 pp. 200-270

（主任指導教官　多和田眞一郎）